

クララ・シューマンの生涯と感動

兎 東 淑 美

はじめに

ピアノを専攻した私にとってロバート・シューマン（Robert Alexander Schumann）は、所謂好きな作曲家であった。ロバート・シューマンの作品を研究する課程に於いて、妻でありピアニストであるクララ・シューマン（Clara Josephine Schumann）が、夫ロバート・シューマンの人生、或いは作曲活動に大きな影響を与え、又ヨハネス・ブラームス（Johannes Brahms）にとっても大きな存在であったことを知り、驚きと感銘を覚えた。クララ・シューマンで特に魅力を感じた端緒となったものは、学生時代に読んだ原田光子著「真実なる女性・クララ・シューマン」（ダウイット社出版）であった。ロバート・シューマンを支えたクララ・シューマンについて考察することは、ロバート・シューマンの音楽を知る上でも大変意義深いものであった。そしてそれ以上に一人の女性としてのクララ・シューマンの生涯に、深い感動と共感を覚えた。今回はこの感動を原点に、彼女の生きた時代背景、生たち、音楽活動、女性として母親としての生活、それらについて彼女の日記あるいは、書簡を通して考察した。

I 時代的背景

クララ・シューマン（以後、クララと呼ぶ）はロバート・シューマンより9年後の1819年、9月13日ライプツヒに生れ、1896年6月5日フランクフルトで没した。彼女が生を受けた19世紀は全体としてロマン主義の時代であると言われているが、社会的には複雑で不安定な様相を呈した時期である。進歩的思想と保守的思想はあらゆる場面で対立し、社会不安があった。これは、前の時代では強力な支配層によって社会が支配されていたのに対し、新しい自由主義が普及して自己の権利を主張するようになった為である。従って、政治的、経済的背景によって進歩―保守の思想が対立したのであった。他面イギリスで始まった産業革命でも解るように産業経済態勢にも大きな変化があり、資本主義と共に社会主義が発展し、これも対立したのであった。このような相克の時代であったが、国家統一の気運及び国力伸長の要請もあり、国民主義の勃興と共に各地で戦争も起こされた。この国民主義は音楽の発展に大きく寄与した。全盛となったロマン主義音楽を基礎づけた社会思潮は国民主義と個人主義の両者であった。

国民主義的思潮は、母国語の尊重という形で音楽上に表われ、やがてそれを媒介として、音楽と文学の強い結びつきを生じ、音楽的には歌曲、標題音楽、オペラなどの分野にすぐれた数多くの作品を生んだ。

個人主義思潮は、極端な個性尊重の形をとり、ここからは名技主義、幻想性など個性の強い音楽を生んだ。

II シューマン夫妻と直接親交があったり影響を与えたと思われる主な音楽家

メンデルスゾーン (Jakob Ludwig Felix Mendelssohn-Bartholdy 1809-1847)

1835年ゲバルトハウス交響楽団の指揮者としてライプツヒに來たことから親交を持ち、ロバート・シューマンも、クララも彼の音楽を強く支持した。ロバート・シューマンは新音楽時報に彼のことを紹介している。又クララはメンデルスゾーンと何回も演奏及び演奏会を行って当時忘れられていた曲等を世に紹介した。

ショパン (Fryderyk Franciszek Chopin 1810-1849)

ロバート・シューマンと同じ年の生れ、1831年、クララの自宅であるヴィーク家の客間の音楽研究で当時無名のショパンの作品が取り上げられた。ロバート・シューマンは音楽雑誌に感動的な文を載せてショパンをドイツに紹介した。クララはショパンの作品を公開の席で初めて演奏した。

リスト (Franz Liszt 1811-1886)

ショパンよりクララのことについて聞いていたリストは、ウィーンで祖国ハンガリーの大洪水救済金募金の為の慈善音楽会を行った折、丁度ウィーンで演奏会を成功させたクララと会う。その時クララはロバート・シューマンの作品〈謝肉祭〉を演奏している。リストはこの時初めてシューマンの曲を聞いて感激している。

ヴァーグナー (Wilhelm Richard Wagner 1813-1833)

パリに於ける苦境時代にロバート・シューマンが発刊していた〈音楽新報〉に原稿を送って來た。ロバート・シューマンは喜んでこれを雑誌に載せたこともある。ドレスデンに夫妻が移った時、ドレスデンの音楽界の中心にのり込み、歌劇の作者として、宮廷指揮者として活躍した。

ブラームス (Johannes Brahms 1833-1897)

1852年、ヨセフ・ヨアヒムの紹介でシューマン家を尋ねる。シューマン夫妻は一見で素朴で純粹で内気なブラームスを気に入る。彼の演奏した作品からロバート・シューマンは、ブラームスの才能を見つけ出し、無名の20歳の青年を世の人々に紹介した。以後死ぬまで40年以上に亘ってシューマン家と親交を持った。

ヨアヒム (Joseph Joachim 1831-1907)

19世紀後半の最大のバイオリンニスト、14歳の時シューマン夫妻と親交を持ち、一生の間変

わらぬ友情を示した。又ヨハネス・ブラームスをシューマン夫妻に紹介した。ベートーベン演奏の権威であり指揮者として活躍した。

III クララ・シューマンの生涯

1 幼少時代 (1819～1832)

1819年9月13日（ライプチヒに生れる）

ライプチヒは富裕な商業都市で、とくに書籍出版と印刷業が栄えた。欧州最古のライプチヒ大学があり、教育と学問が盛んで市民の教養も高く、又バッハが30年近く生活した土地としても有名で、音楽の面でもすぐれていた。父親フリードリッヒ・ヴィークは、大学で神学を専攻し牧師としての将来があったが、少年の頃より続けた音楽への情熱を捨てきれず、ライプチヒに出て、ピアノ教師となった。彼は古今のピアノ奏法を詳細に研究し、新たに独自の奏法を案出した。ピアノ教師としてすぐれた能力を持ち、名声を得た。仕事面には計画性があり、新しい試みを積極的に行い、研究熱心な人物であったが、家庭生活の面でも計算高い種類の人物であった。結婚後2年で音楽回覧文庫を経営し、次いでピアノの製造会社の代理店の経営を行い成功する。これは多くの音楽家と親交を結ぶ目的であった。

母親アンナは19歳で結婚し、ヴィークの門下生の一人であって音楽に秀でていた。彼女は温順な性格で、美しい声とすぐれたピアノの演奏能力を持っていた。又彼女の祖父はゲバントハウスの第一級のフルート奏者であった。このことがヴィークをして結婚の決意をさせたとも言われている。

（クララは光り輝く者の意である）

父の手によって次のような文章で始められる日記は、その後クララ自身によって書き続けられ、彼女が没する1896年まで休むことなく続けられ全部で47巻に及ぶ。

私は1819年9月13日ライプチヒで生れ、クララ・ヨセフィーネと命名された。両親は二人共、ピアノの教授に忙しかったので私は女中のヨハンナの手にまかされて育った。私が4～5歳になるまで発音出来なかったのはヨハンナの発音が明瞭さを欠いていたらしい。しかしピアノの演奏は始終聞いていたので、私の耳は人の言葉より敏感になっていた。口の方も次第に進歩していったが、それでもこの欠陥は8歳になるまで残っていた。

1823年（クララ4歳）よりピアノを始める。この頃生母がヴィーク家を去る。5歳、父の試みにより組織的な音楽教育を受ける。当時のレッスンは毎日父親より1時間、自分で2時間の合計3時間を行い、この間に素晴らしい進歩をした。8歳の誕生日の頃、モーツァルトの変ホ長調の協奏曲を立派に演奏する。1828年9歳でゲバントハウスの演奏会で初舞台をふむ。同年カールス邸で催された音楽会でクララは演奏する。この時音楽会を聞きに来ていたロバート・シューマンと初めて会う。

ロバート・シューマンの登場

ロバート・シューマン（以後シューマンと呼ぶ）は1810年ツヴィツカウに生れる。祖父は牧師、父親アウグストは苦学の末出版商、著述家となった。母親ヨハンナは、父より6歳年上で外科医の娘、明るく知的で深い感情の持主であった上に、「生きた歌の手本」と呼ばれる程、歌が上手であった。シューマン（4男、末っ子）が生れた頃のシューマン家は、経済的基礎も確立し、秀れた両親の下で裕福で暖かい教養豊かな家庭であった。7才よりピアノを正式に習い、自己流の作曲もこの頃からしている。中学生の頃、友人と音楽仲間を作り、彼がピアノを弾き、しばしば演奏会を行った。又家が書店であった為、多くの本を読み文学の方面に於ても著しい才能を示した。自宅で友人と演劇を上演したり、学校にあっては「ドイツ文学協会」に籍をおいて、協会の会則や目的など彼自身の手で作った。会員達は詩や詩人の研究を行った。この様な中でシューマンの心をゆり動かした1人の詩人はジャンパウル・リヒターであった。(1763~1825)古典主義とロマン派の間の詩人で、夢見がちな彼の作品はシューマンの心をとらえ、生涯を通して創作の原動力となった。シューマンの書いた小説、詩、手紙、音楽批評の文体に多大の影響を与えた。

1826年神経を病んだ姉が投身自殺をし、父親も重病で亡くなる。この事件を境に、のびやかで明るいシューマンは、口数の少ない内気な性格となった。

その後、将来の進路を決める時期が来た時、母親は不安定な音楽家の生活に反対した為、シューマンはライプツヒ大学の法学部に進んだ。カールス邸の音楽会に行ったのは、この様な時であった。

1828年（クララ9歳）新しい母が来る。1829年イタリーのバイオリンの巨匠パガニーニを訪問、彼はクララの演奏の中に生れつき持っている美に対する純粋な感覚を見い出す。その結果父親はクララをパガニーニに匹敵するピアニストに仕上げる野心を抱く。11歳で正規に音楽理論、管弦楽法、対位法を学ぶ。

1830年、シューマンはヴィークより正式にピアノを学ぶ為ヴィーク家に同居する。シューマンは子供好きであった為、クララと弟たちは兄の様なシューマンを好み、彼のする数々のお伽話や、その他の話に心を奪われた。

ヴィーク家の客間では音楽の研究が行われていたが、1831年、ショパンの〈作品2〉が取り上げられた。シューマンは「諸君、帽子を取りたまえ、天才だ」との有名な言葉を含む感動的な一文を音楽雑誌に発表した。そしてこの作品と作曲者ショパンをドイツに紹介した。その後クララはショパンの作品の演奏を行った。彼女はショパンの作品を公開演奏会で弾いたピアニストとしての榮譽を持っている。

クララのピアノ演奏は、シューマンを新しい音楽の理解へ導く役目を課す様になり、音楽はクララとシューマンの間の9歳という年齢の開きを超越した精神の理解を築いて行った。

1831年、クララと父ヴィーク、パリへ行く。その旅行の途中ワイマールでゲーテと会う。ゲ

ーテは12歳のクララの演奏を聞き、自身の知性と感性に従って演奏していることを指摘する。

パリでは7月革命の余波の興奮状態が続いていた。その中でクララは一音楽学校の講堂で演奏会を行い、生れて初めて全曲を暗譜で演奏した。又これが初めて公開の席で暗譜演奏が行われた記録で、クララはその点でも榮譽を持っている。

この間、ライプチヒにいたシューマンはピアニストになるべく猛練習を行い無理な練習から第4指の筋肉をこわし、ピアニストの道を断念して作曲に打込むことになる。

2 恋の芽生から結婚へ (1832~1840)

1832 (13歳) クララはカプリスやポロネーズの作曲をする。

1835年バッハの三台のためのピアノ協奏曲を発見、メンデルスゾーンは50年ぶりでこの曲をゲバントハウスで演奏。この時の三人の奏者はメンデルスゾーン、クララ、ラーケンであった。その後クララはメンデルスゾーンと呼応し、バッハとベートーベンの作品を紹介するため各地で演奏会を開く。

1837年 (18歳) ウィーンに行く。この時ベートーベンの熱情ソナタを公開演奏で弾く。(クララはベートーベンのピアノソナタを数多く最初に公開演奏している) 当時のウィーンでは、ショパンが一部の人に知られていたが、メンデルスゾーンも、シューマンも知られていなかった。そこでクララは〈シューマンの夕べ〉を開き、彼の作品を演奏した。この時、ハンガリーの洪水による救済募金演奏会を行っていたフランツ・リストと会う。クララとシューマンはウィーンとライプチヒで手紙を交し、愛情が深められてゆく。父ヴィークはシューマンの非凡な才能を認めながら結婚に強く反対するがシューマンのピアノ曲を演奏することについては許した。この頃のシューマンからクララへの手紙の文中には、彼等の結婚についてヴィークが反対して行いう行為や言動に動揺している様子が書かれているが、クララは、彼を刺激することなく豊かに包む手紙を書いている。

1838年 (19歳) 激しい父の反対の中でクララは、シューマンとの結婚を決意しパリへの演奏旅行に1人出発する。父は先手を打って各地で演奏の妨害を計る。この為、苦勞の多い心細い旅をする。しかしクララの人柄はそれぞれの場所で好意を持って迎えらる。

1839年ヴィークが二人の結婚について、余り無謀な条件を出した為、結婚に関して法律による解決の手続きをとる。1840年8月12日判決が下り二人の結婚が認められる。

3 ロバート・シューマンと共に (1840~1856)

結婚式の前夜にシューマンは〈わが愛する花嫁に〉と献呈の辞をミルテの葉にそえて贈った。これは後に〈ミルテ〉と題した歌謡集となった。その中には有名な〈蓮の花〉〈君は花のように〉〈胡桃の木〉などの作品が含まれている。(ミルテの花は、昔から北欧では花嫁のヴェールに飾られる習慣がある)

結婚式は1840年9月12日ライプチヒ郊外で行われた。結婚後シューマンは心の平安を得て作曲に専念し、クララは彼の交響曲のオーケストレーションを助ける。又朝に夕に二人でバッハ、或いはベートーベンの研究を行った。1841年9月1日長女マリエ誕生(その後14年の間に彼女は8人の子供が授かった。)

1843年父と和解，1844年シューマン夫妻はロシアの旅にのぼる。旅から帰ったシューマンは作曲に打込むが，余り没頭し過ぎた結果過度の疲労となり神経過敏症状を引き起した。色々の療法を試みるが効果なくクララは環境を変えてドレスデンに転地することを決心する。

この年シューマン夫妻は14歳のハンガリー生れのバイオリンニスト，ヨセフ・ヨアヒムを知る。クララはシューマンの変ホ長調のピアノ四重奏曲を初演したり，ゲバントハウスでベートーベンの〈皇帝〉を弾いたりする。

1845年ドレスデンに移る。

シューマンは健康を取もどし作曲を開始する。交響曲やピアノ協奏曲が出来る。これらの作品はシューマン自身の指揮によって，或いはクララによって初演された。

1847年5月，長男エミール没す。同年メンデルスゾーン没す。シューマン夫妻にとって大きな悲しみであった。

1848年，欧州各地に自由民権を要求する烽火があげられた。ドレスデンでも3月3日に革命が起きる。3月5日男性はすべて召集されることになり，シューマン家にも二度人が訪れる。三度目に家宅搜索をするという脅迫に，彼女は当時のロバートの健康を憂えて，ドレスデンから脱出を考える。長女マリエを連れシューマンと共にあたかも散歩のごとくマークセンに向かう。翌日午前3時別荘管理人の娘とマークセンを出発ドレスデンに帰り，3人の子供を連れてマークセンにもどった。当時下の子は9カ月，クララ自身も6カ月の身重であった。3人の幼児を連れての脱出は，並大抵ではなかった。

1849年ドレスデンからデュッセルドルフに移る。

シューマンはデュッセルドルフの管弦楽団の合唱指揮者となる。デュッセルドルフの人々から尊敬を持って迎えられる。

1851年夫妻は南ドイツとスイスの旅に出掛ける。楽しい二人の心に残る旅となる。

1852年9月ヨハネスブラームスがヨアヒムの紹介でシューマン家をおとずれる。シューマン夫妻は一目で純粋なブラームスを愛した。気に入った。天才のみが天才を知るシューマンは深い洞察力を持って見たばかりの青年のまれに見る素質を感知したのであった。シューマンはブラームスに「君と私はお互いによく理解している」と静かに言った。シューマンは10年取らなかった筆を取って〈新しき道〉と題して推薦文を書き世の中にブラームスを紹介した。クララはブラームスのピアノ教授をした。ブラームスよりOp 2 嬰へ短調のソナタがクララにおく

1854年2月シューマンは聴覚の異常により作曲を止めてしまう。クララは自分のすべての時間を家事と夫の看病にささげる。2月26日シューマン，ライン川に身を投げたが助けられる。3月4日エンデニッヒの病院に入院，この時クララは6カ月の身重であった。実母のバルギール夫人とブラームスがかけつける。ブラームスはシューマンの回復した暁には附添人の役を引き受けると申出て，男手のないシューマン家を助ける。6月11日悲しみのうちに4男（末子）フェリックスが誕生する。シューマンの財産は5,000タラーになっていたが気丈なクララは子供の将

来を考えて手をつけないで、演奏によって一家の経済を支える覚悟をする。その後クララは1人で演奏旅行をする。ブラームスはクララに代って子供のめんどろを見、エンデニッヒのシューマンを見舞い、弟子の代稽古をして、それぞれについてクララに様子を知らせている。21歳の青年とは思えない忍耐力を持ってクララを助けた。青年ブラームスのシューマン夫人に対する親愛の情は、やがてほのかな恋心となり、それは日毎に成長していった。

この頃のクララは、演奏会に於いてブラームスの速度の遅い曲を選んで音楽会のプログラムに加えている。そんな中でシューマンの容態の悪化は進んでいた。

1856年7月29日、ロバート・シューマン・エンデニッヒにて没す。シューマンの入院後医師は身重のクララの体を思い、シューマンの容態を考慮して、亡くなる前日迄クララをシューマンに会わせなかった。

クララが遺品を整理すると清書した楽譜と共に、本人の手でクララや子供達からの手紙がまとめられていて、ピンクのリボンがかけられてあった。クララ36歳、マリエ15歳を頭にフェリックス2歳（生れて一度も父親の顔を見なかった）まで7人の子供が残された。

マリエ・シューマン（父の寵児であった）の手記より

一生をふり返ってみる時に、私の少女時代はまるで光輝いているごとく思い出される。両親と共にある幸福、両親にとって我々子供たちが、世の中で最も大切なものであるという自覚は、両親の庇護に対して安定感と確信を私に与えるのであった。あの不幸な運命が我々の前に訪ずれた時、それは失われて、昔のごとくは二度と帰って来なかった。

4 未亡人となって (1856～1896)

1857年1月1日ゲバントハウスで未亡人となって最初の舞台を踏む。19世紀後半絢爛たる技巧派の男性ピアニストにまじって、彼女の演奏は慎しく、独自の存在を主張した美しいものであった為、多勢の聴衆から受入れられた。（この頃からリューマチの痛みが起る）

1858年パリへ演奏旅行、パリではシューマンの曲が理解される様になっていた。クララはここで、ブラームスの作品を紹介する。

1826年バーデン・バーデンに別荘を持つ。別荘にはクララの人柄を慕って多勢の音楽家が訪れる。又離ればなれに暮している子供達とクララを中心とした夏休みが過ぎた。ブラームスの手紙もこの頃になると、お互いの進むべき道を知り、落ち着いた筆致となる。

1865年クララと次女エリゼがフランクフルトで演奏会を行う。

1870年普仏戦争の勃発により頼りにしていたフェルディナンド（3男）が動員される。ルドヴィック（2男）は精神異常が確認され、クララ最大のショックを受ける。

クララの子供達（女の子）マリエ、エリゼ、オイゲニーは高い教養の持主であった。4男のフェリックス（末子）は将来バイオリンニストになりたい希望があった。フェリックスは愛情豊かで優秀な子供であったので、クララはこの子にシューマンの名を再び世に出す希望を持った。

1872年3女ユリー結核で没す。

1873年盛大なシューマン記念音楽祭が開かれ、クララ演奏する。子供達にとっても心に残る会となった。フェルディナンドは普仏戦争従軍の折に始まったリューマチが悪化する。激痛を抑えるために使ったモルヒネで中毒患者となる。父フリードリッヒ・ヴィーク没す。フェリックス結核で療養所に入る。

1874年クララ、リューマチがひどくなり、公開演奏が不能になる。手紙さえ書けなくなり口述筆記をしなければならない日が続く。

1878年クララ演奏生活50周年記念の祝賀会が催された。

1879年2月16日フェリックス結核で没す。クララは日記の中で「人間は子供を葬るために長命しているようだ」と述懐している。

1884年ロンドン訪問演奏、シューマンのノヴェレットは当時大流行となっていた。

ブラームスはその頃作曲界の権威者となりながらも、作品が出来る度にクララに楽譜を送り、意見を聞いている。あらゆる楽聖の中で最も謙遜して自分の作品に対して他人の意見を聞いた人であった。ブラームスは晩年、孤独を愛し気難しくなった。クララは老境に入り、演奏中に突然発作が襲ったりするが、肉体条件と戦いながら平静さを保って演奏した。その後聴覚の減退を来し74歳になると完全に聞えなくなってしまった。音楽院教授の地位を退いてからも、自宅で孫たちにピアノを教える。

1891年20年に亘り重荷であったフェルディナンド没す。

1896年5月20日クララ・シューマン没す。

1897年3月3日ブラームスも孤独な生涯を終る。

IV 考 察

1 父親の教育

クララの生涯の中で父ヴィークの存在を考える時に、大きく分けると2つのことが言える。まず第1に、ヴィークはクララの音楽教育を計画的に行った人物である。第2にシューマンとクララの結婚について徹底して妨害した人物である。ここでは第1の点について考える。

父ヴィークはピアノ奏法について詳細に研究した結果、娘クララをロマン主義にそったピアニストにしようと考えていた。ヴィークはクララが小さい手で聞き覚えたメロディーを弾き始めた頃から、ピアノを歌わせることの重要性を教え、音楽の心を大切にした。そして「テクニックは手段であって目的ではない」と言う彼の教育の信条に従って教育を行った。その結果、クララは年齢的には小さくとも人々の心を打つ演奏を行った。そんな中でヴィークは、クララの精神的な発達のもも大切に考えた。そのことについて述べている一文がある。1830年3月(11歳)ドレスデンに最初の演奏旅行を行った折、クララはサクソニー国王の前で御前演奏を行い、ドレスデンの上流社会各方面から驚くばかりの好意ある歓迎を受けた。この時ヴィークは、次の様な手紙を妻に送っている。

「我々は期待以上の大歓迎を受けています。彼らの喝采と讃美がクララに悪影響を与えないかと案

じられますが、もしもその危険が少しでも認められたら、さっそく出発し彼女を中流階級の生活環境の中に、つれもどすつもりです。あの娘の静かな、慎ましさを私は世界のいかなる榮譽とも取替えたくありません。あの子は昔のままの無邪気な自然の可愛らしい少女ですが、時には驚く程の深い想像力と理解力を示し、我儘ではありますが、高貴な敏感な性格を持っています。演奏中は信じがたい程に落ち着いて、聴衆の数の多い程立派に弾きます。」

この手紙では、クララの精神面を大切に思う父親の暖かさが伺われる。

又ヴィークは、クララの日記を書き始めた人である。クララに日記を習慣づけ、47巻に及んだことは、後世に生きる我々にとって、大きな意味のある贈物である。日記を読み当時のことを彷彿と出来ることは、何と素晴らしいことであろう。

ヴィークは常に研究熱心であった為、当時のヴィーク家の客間には多くの音楽家が集り音楽の研究が真面目に行われた。ヴィークの行ったこのような生活と音楽の結びつきは、後にシューマン夫妻にも受継がれ、やがてブラームスが世に出たのである。

クララは父が亡くなった折、次の様に日記に記している。(1873年10月)

「父の最後は平和であった。88歳になっていたが芸術と自然に親しんで、感情は常に青年のごとく生々としていた。父と共に私の青春への絆が消去ったことを、私は深く感じる。私達は種々の点で一致出来なかったが、感謝の気持で温められた父への私の愛情は、私の一生を通じて何者も犯すことは出来なかった。父は何と長い歳月を私の教育にささげ、現実生活の美しさへの私の理解を深めるために、何と大きな影響を与えたことであろう。……父を失った深い悲哀は、言い表わすことが出来ない。幼ない頃の私にとって、父はすべてであった。」

当時クララは54歳で次々と子供達が病におかされている苦しい時代であった。生来勤勉で質素な生活に甘んじた父ヴィークは6万タラーの遺産を残した。クララと父はシューマンとの結婚をめぐって長い確執があったにもかかわらず、クララに対しても好意ある配慮がなされていた。このことを知ってクララは深い悲哀を感じている。これは親と子の関係を改めて考える感慨深いものである。

2 クララとロバート・シューマン (シューマンの書簡を通して)

クララとシューマンの両方の家系を見た時に、共通していることがいくつかある。

まず第1にクララの父ヴィークが神学を専攻した人物であることに対し、シューマンの祖父が牧師であったことである。その事から両家には真面目で信仰心の厚い家庭の様子を想像することができる。

第2にヴィークは結婚後、音楽回覧文庫の経営をしたのに対し、一方シューマンの父は出版商であり著述家であった。又母は父アウグストの集めた4,000冊の本の一部を利用して貸本業を行っている。

第3にクララもシューマンも真面目で教養豊かな両親の下で成長してきていることと、経済

的にも裕福に育ったことである。

1832年2月1日ライプチヒに居たシューマンは、演奏旅行で父ヴィークとパリに行っているクララに手紙を送っている。この手紙には当時の両者の間柄をよく伺わせる記述が認められる。その時21歳のシューマンは13歳のクララに

尊敬するクララ

昨日デイダスカリア誌上で、クララ・ヴィーク嬢の演奏によるヘルツの変奏曲云々という記事を読んだ時、どうしても微笑が浮んで来るのを押えることが出来ませんでした。ああ、尊敬するフロイライン、どうぞお許し下さい——他のどれよりも美しい尊称を使ったこと——つまり何もつけなかったことを。——誰がバガニーニ様、ゲーテ様などと云うでしょう。あなたは考え深い人だからいつもの月夜彷徨症の迷作りを理解して下さるのを知っています——とにかく愛するクララ！僕はあなたの事を良く考えます。兄が妹のことを、男の人が女友達のことを考えるようにではなく、巡礼者が祭壇の画像のことを考えるようにです。僕はあなたの留守の間にアラビアに行って来ました。あなたが満足するようなお伽話を一杯集めて来ました……略

ここには楽しいお話のこと、クララの留守中の弟の様子、音楽の勉強や、新しい作品の出来た事などが書かれているが、クララのことについてシューマンが特別な気持ちでいることが書かれていて注目される。

1832年シューマンが〈ライプチヒの記録〉と名付けた日記には、毎日クララのことが述べられているが、そんな或る日の中に

「6月4日……クララは我儘なことを言っていた。年長者が真面目に述べる非難の数言は、きっと彼女の心に良い効果を与えるであろう。彼女の気まぐれな虚栄心をうまく刺激して、芸術家にとって最も必要な自尊心にまで、成熟させればよいと思われる」

この中でシューマンは、クララの成長が芸術家の成長につながることを期待して見守っている様子が伺える。この様にしてクララの成長には常にシューマンが大きく影響を与えるようになる。クララは演奏を通して多勢の音楽家と接する機会を持つが、静かで内面的で素朴なシューマンの中に理想の男性を見ている。

1838年3月の土曜日の午後、クララのもとへシューマンから手紙が届けられた。

……私は作曲しているものについて触れるのを忘れてはならないのです。あなたがかって私に書いて、「私はあなたには時々子供の様に見えるでしょう」と云ったことへのこだまなのです——つまり私は子供のエプロンをつけていた頃の気持ちにかえて、30の奇妙な小曲を作りました。その中から12曲を選んで〈子供の情景〉と名づけました。あなたは楽しんでくれるでしょう。しかし貴女は自分がピアノの名手であることを忘れてくれなければいけません——次のような名前がついています。——びっくり——炉ばたにて——鬼ごっこ——おねだり——木馬の騎士——見知らぬ国から——珍しいお話などなど。……

これは〈子供の情景〉を作曲した時の手紙である。これはこの曲を理解し演奏する上でも非常にわかりやすいものである。〈子供の情景〉作品15は、有名なトロイメライを含む13曲のピアノ小品である。トロイメライの方が先に出来ていて、後に手紙に書かれている12曲と合わせて13曲となった。トロイメライはシューマンの幸福の時に書かれたものらしい。クララは「誰に献呈しますの」とたずねているが二人だけのものらしく、誰に対しても献呈されていない。〈子供の情景〉はシューマン28歳、クララ19歳の時の作品で、この頃二人は結婚について父ヴィークに話合いをしているが、父ヴィークは結婚したらライプツヒに住まないこと等……色々無理難題を出していた頃である。そんな時にクララの言葉からこの作品が出来ている。この曲全体を見ると、それぞれの題とメロディーを通して、ヴィーク家の居間で、クララの姉弟がシューマンより話を聞いて夢をふくらませたり、遊んだりしている様子が想像出来て興味深い。

1839年6月3日のシューマンの手紙

貴女はこの手紙を僕の29歳の誕生日に受取るでしょう。我々は過ぎ去った年月を悔ゆることなく回復することが出来ます。お互いに真実でありえ、前進して今や決勝点に近づきました。一番困難な時代はもはや過ぎ去ったようです。しかし港に入っても尚、用心が肝要です。我々はまた一寸また一寸と少しずつ、戦いとしてゆく運命となりましたが、祭壇に立った時「しかりの答が、この様な未来の幸福に対する絶対の確信のもとに答えられることは、かつてないことだろうと信じます。

その時までには僕はますます貴女にふさわしい者になりたい。どうか口先だけの言葉と受取らないで下さい。僕は傲慢なる者の前には誇りを持っていますが、貴女の慎しさの前には、喜んで欠点をさらけ出して、改めたいと努力します。今後もきっと僕に失望なさることもありましょう。僕には男性として多くの短所があります。僕はしばしば落着かず、子供らしく、決断力に欠けていますし、考えることなく快楽に我を忘れたりします。しかし貴女がときどき見せて下さるような忍耐や愛情は、きっと僕に影響を与えるでしょうし、貴女を近くに持つという事実が、僕を善人にするでしょう。しかしこれは言葉にすぎません。確実なのは二人が愛していることです。貴女の心には、夫を幸福にする愛が豊かにたたえられていることを信じます。クララ！ 貴女は素晴らしい娘だ！ 貴女の中の美しいまれに見る素質が、あの様な環境の中で短い間に、どうして豊かにされたか不思議なことです。ひとつ僕の知っているのは僕のなごやかな性格が、貴女の幼女時代に1つの印象をあたえたことです。もしも僕を知ることがなかったら、貴女はもっとちがう娘になっていたことと僕は信じています。

僕は貴女に愛を教えた。父上は憎悪を教えた(もっともよい意味にですよ！ 人間は憎むことも知らねばなりませんから)そして僕は夢想している理想の花嫁を貴女の中に見い出した！ 僕に自らを慰さめさせて下さい。

この手紙は結婚について、長い間ヴィークの猛反対に合い、最後に正式の結婚許可を求める訴訟を起す約1カ月程前の手紙である。クララは父とシューマンを平和的に結び付けようと努力を重ねるが、父は全ての事に無謀な条件を出続けていた。彼女はシューマンとの結婚を決意して、父の下を離れ1人パリーに於いて演奏会をする準備を行っている頃に、シューマンが送ったものである。シューマンが彼女の深い愛情と勇気と慎しさの中に、喜びに満ちて書いた手紙

は、クララの性格形成とシューマンとの関わりを知る事が出来て興味深いし、結婚に対して真面目に注意深く事を進めて行く様子が解る。

3 ピアニストとしてのクララとその業績

1832年～1833年の頃（クララ13～14歳）シューマンは雑誌〈慧星〉に「アンナ・ヴェルヴィーユとクララ・ヴィーク」と題する一文を寄稿している。（アンナ・ヴェルヴィーユは1808～1883, チェルニーの門下生で当時の女流ピアニスト）

二人を比較することは出来ない。各自異なる流派をくむ名人である。ヴェルヴィーユの演奏は技巧的に美しい。しかしクララの演奏は、より情緒的である。ヴェルヴィーユの音は快くはあるが、耳までしか達しない。しかしクララの音は、聞く者の心まで滲透する。彼女は女流詩人であり、これは詩そのものである。

1837年、ウィーンでリストはクララの演奏を聞き、次の様に述べている。（クララ18歳）

私は幸せにも、この冬のシーズンにウィーンでまれに見るセンセーションを巻起した若きピアニスト、クララ・ヴィークを知ることが出来た。彼女の才能は私を喜ばした。彼女は完全な技巧を持ち真摯な感情の深さを持っているし、ことにその気品の高い演奏態度は注目にあたいする。ベートーベンの（へ短調奏鳴曲）へ与えた、彼女の非凡な驚く程洗練された解釈は、有名な劇詩人グリル・パルツェルをして、この愛らしき芸術家へ讃美の詩を書かしめたのである。

二人の音楽家の文章より、クララの演奏やその態度が人々の心を打った事が訳る。

クララは少女時代からまだ世に出ない作曲家の曲や、知られていない楽聖の曲を演奏した。シューマン亡き後もシューマン未亡人として、シューマン、ブラームス等の曲を広く世に伝えて行った。現在シューマンやブラームスの曲が多くの人に演奏され、又聞かれるのは、クララの生涯を考えて見る時に彼女の努力が大であったと思う今頃である。又未亡人となり、次々と起る不幸を背に負い乍ら演奏を続けたこと。老境に入りリューマチの痛みと戦い乍ら、或いは失われゆく記憶を取りもどすべく努力し勉強する姿が日記に印されているが、それを読む時に、深い感動が残る。

4 母として女性として

クララの生涯の中でドラマティックな時期がいくつかあるが、その中の1つでドレスデンの革命の折のクララの姿は感激する。この時のクララの勇気を思う時に、私はシューマンとの結婚を前にしてパリに1人で向ったクララを思う。クララは度々各地へ演奏旅行をしていたので当時の普通の女性より世情や、地理に明るかったと思う面もあるが、ほとんど毎年のように子供を産み、その時も身重であり乍ら、とっさの判断で決行したことは生活力に於ても非常な逞

しさを感ずる。

シューマンの死後、シューマンを思って子供達に残した文章は、母としての考えをしっかりと伝えている文章であるし、ブラームスについて書かれている所は、クララの物事に対する折目正しさと節度を感じる文章である。

又、シューマンの死後の経済的な面では、シューマンの預金に（子供達の将来を思い）手を付けず、演奏によって生活を支えた。各方面から援助の手がさしのべられるがメンデルスゾーンの弟からと、何十年もたってからブラームスから受ける以外は、みんな丁寧に断っている。クララのバイタリティーとシューマン夫人としてのプライドを感じる。

次にシューマンの死後または病気になってから、クララはそれぞれ子供7人を実母に預けたり、知人の下より上級学校に通わせたり、全寮制の学校に入れたり、自宅で育てたりと色々な方法で育てるが、普段は演奏旅行で留守がちな家庭を考え、バーデンに別荘を買い夏休みを皆んなで過ごすなど、子供の事を考えている生活が解る。しかし、クララの生前に、男の子全員4人と、3女を亡くしたのを考える時に、運命もあり、当時の医療の状態の悪さもあると思うが、演奏家（特に女性の場合）の生活の如何に過酷であるかを思われて悲しい。

おわりに

長い間、心に温めていた課題であったが、残された書簡を通しての考察だけに、直接原文に触れて得られる感動を願ったり、その必要性を感じた。その為語学力不足を感じたり、クララの生活の地であった現地に赴いての調査をしたい願いにかられた。クララの生涯を通し思うことは、勇気、愛、努力、忍耐、祈り、誇りであったと思う。女性音楽家として、シューマンの妻として、母として、彼女の生涯からは多くの教訓と感動を得た。

参考文献

- 「真実なる女性・クララ・シューマン」 原田光子著 ダヴィット社
「シューマン」 愛と苦悩の生涯 若林健吉著 新時代社
「新音楽史」 H・M・ミラー著 村井範子、松前紀男、佐藤馨共訳 東海大学出版会
「標準音楽辞典」 音楽の友社出版